



シンポジウム 社会学 v.s. 建築 v.s. アート いま「空間の自由」を問う - 社会 / 建築 / アートの交点 -

2006年9月2日(土) 14:30~17:30 せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

目次

1. はじめに
2. シンポジウム要旨
 - 1) 「空間管理」のパラドックス
- 「安全」を囲い込めない住空間 -
 - 2) 空間の実践
 - 3) 「パラドックス (概念)」から
「トレードオフ (現実)」へ
3. パネリスト略歴
4. 学際研究会*1
5. 関連出版企画

はじめに

「いま『空間の自由』を問う」というタイトルのもとに開催する本シンポジウムでは、空間の研究／実践／制作に第一線で携わっている方々に徹底した議論を交わしていただくと考えています。

今回の企画の元となった私どもの研究会*1では、社会学、文化研究、住居論、建築計画、メディア論といったさまざまな切り口から、現代社会における空間の変容について批判的に捉え直す試みを重ねて参りました。その結果、今の社会に潜む暴力や抑圧の問題を解明すると同時に、そうした支配に抗う解放の契機や可能性を「空間の自由 (freedom of space)」という視座から論じていくことがなによりも求められている、との認識に至りました。このシンポジウムはそのような場所から産み出されたものです。

開催にあたり、私たちは以下のような思いをシンポジウムに込めています。さまざまな学問／実践／制作の現場において「空間」が注目されている現在、人々が生きる社会的な空間はどのように変容しつつあるのか。そこにおいて「自由である」こととは、いったいなにを意味しているのだろうか。

「空間と自由」をめぐるこうした根本的な問いを巡って、異なる領域で活躍している人々が一堂に会し、刺激的な論戦＝バトルを交わす場を設けてみたい。そこでの意見のぶつかり合いのなかから、これからの「空間の自由」の可能性を展望したい。

本日のシンポジウムでの議論を通じて、ご参加いただいた皆さまが、それぞれの仕方で「空間の自由」について体感していただければ幸いです。

阿部潔 (あべきよし)

主催

関西学院大学 21世紀 COE プログラム
せんだいメディアテーク





シンポジウム 社会学 v.s. 建築 v.s. アート いま「空間の自由」を問う - 社会 / 建築 / アートの交点 -

2006年9月2日(土) 14:30~17:30 せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

目次

1. はじめに
2. シンポジウム要旨
 - 1) 「空間管理」のパラドックス
- 「安全」を囲い込めない住空間-
 - 2) 空間の実践
 - 3) 「パラドックス (概念)」から
「トレードオフ (現実)」へ
3. パネリスト略歴
4. 学際研究会*1
5. 関連出版企画

「空間管理」のパラドックス - 「安全」を囲い込めない住空間-

安全 (security) が求められる社会にわれわれは生活している。安心して、快適な生活を可能にするために安全が求められる (草の根セキュリティ)。しかし、安全を可能にするためには、空間そのものを監視状態に置かなければならない。つまり、われわれは常に見張られていなければならない。自らのプライバシーと引き替えに、安全な空間=監視された空間で、生活の安心や快適さ、利便性を甘受している。

近代的な価値観に即するならば、ここには「自由 \leftrightarrow 不自由」の対立関係があるはずである。しかし、現実的には安全な空間=監視された空間のなかでこそ、安心して自由に振る舞うことができるとみなされる。「安全な空間」=「空間の不自由」=「自由な振る舞い」という関係が成立する。なぜ、このような近代的なプライバシーや自由についての考え方と矛盾する関係が成立するのか。そのメカニズムを具体的な空間の姿をとおして解き明かす課題に直面している。

こうした矛盾する空間の典型的な形態が、セキュリティ・タウンやセキュリティ・マンションといった、一種のゲーティッド・コミするための建物の配置、監視カメラ、ゲート、センサーシステム、警備員による巡回・・・といった建築テクノロジーや ICT (Information & Communication Technology) を駆使した集住の空間がすでに数多く作り出されている。空間は、常にテクノロジーと接続され、純粋なプライバシーの空間はもはや物理的に成立しなくなっている。さらに、そこでは往々にしてコミュニティが重視され、防犯パトロール、防犯マップづくりといった、安全のための住民による自助努力が動員される。

一見して「安全な空間=安心して生活できる空間」を可能にしているかのような、こうした空間は、安全を求めて空間を囲い込もうとすればするほど、反対に自らの住む営みの自己否定に至ってしまう可能性すらもっている。まず何よりも、完璧な安全の空間を作り出すことは不可能に近いし、住む空間のために駆使されるセキュリティ・テクノロジーは、完璧な安全を目的としえないからである。そして、囲われた空間は、安全が排他的に占有された空間であり、われわれ以外の人がと集まって住む可能性を放棄してしまう可能性すら有しているからである。この事態は、安全といったときに閉塞していく「空間の不自由さ」に他ならない。

佐幸信介 (さこうしんすけ)

主催

関西学院大学 21世紀 COE プログラム
せんだいメディアテーク





シンポジウム 社会学 v.s. 建築 v.s. アート いま「空間の自由」を問う - 社会 / 建築 / アートの交点 -

2006年9月2日(土) 14:30~17:30 せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

目次

1. はじめに
2. シンポジウム要旨
 - 1) 「空間管理」のパラドックス
- 「安全」を囲い込めない住空間 -
 - 2) 空間の実践
 - 3) 「パラドックス (概念)」から
「トレードオフ (現実)」へ
3. パネリスト略歴
4. 学際研究会*1
5. 関連出版企画

空間の実践

今我々が生きているグローバル化の世界というのは、国境を越えて人が交流するとか、異文化が混じり合うとか、そういう心温まることだけではなく、資本が全世界規模でなりふり構わぬ実践をするという残酷な部分を伴っている。資本の実践は、各地において障害となる古い制度や、物理的な構造を破壊し作り替えていくことによって、間接的なかたちで私たちが生きている空間や社会関係や風景を作り替えている。現に東京では、地価の高い都心の土地を、それがもともと住宅地であろうとなんであろうと、気の抜けた高層ビルとショッピングモールに置き換える大規模再開発があるし、地方都市では田園風景の中に忽然と巨大ショッピングモールあり、ともに資本の実践の一つの典型になっている。その一方では人口減少により維持が困難になった公共施設や、にぎわいを失った旧市街があるが、これは資本の実践にとって魅力がない地域の現象ということもできる。こうした変化は、都市計画の理想主義の延長にあるわけでもないし、生活文化の延長にあるわけでもないのだから、それを理解することはなかなか容易なことではない。そこに想像力の空白のようなものが生まれている。現在出現しつつある都市風景というのは、この想像力の空白が露になったものと言うこともできる。この空白を現実の設計作業に接続する回路は何だろうか？ どうすればこうした空白を相手に建築の意味を獲得することができるのだろうか？

この空白の領域を捉えようとするとき、アンリ・ルフェーブル言うところの「空間の実践」は、一つの視座を与えてくれる。ルフェーブルの「空間の実践」というのは身体を介した原始的なものから、政治的なものまで様々な次元があるので、一筋縄にはいかない複雑でわかりにくい概念なのだが、ここではひとまず「ある空間が社会に出現し、維持されていくこと、あるいはそのやり方」としておく。つまり空間に主体をおくような見方なのである。従って、先ほどの空白の都市風景も、それはそれである種の空間実践の結果であるということができる。建築空間論はまず建築ありきなわけだから、建築がどのように出現し、維持されるものであるのかについては言葉を持たない。しかし、そういった空間を誰が何のために必要とし、どのように管理され、利用されていくのかということが、建築の作り方を規定し、空間の質に著しい影響を与えてしまうことは明らかであろう。建築を設計するということは「空間の実践」の一部でしかない。しかし、空間の実践の物語を増幅させることはできる。そういった相対化された視点で、実践の面倒な諸相から学びつつ、時には批評しながら、建築の意味を発生させるコンテキストを見いだしていくことが、結局は建築の地平を新しく作り替えていくことになるのではないだろうか。

塚本由晴 (つかもとよしはる)



主催

関西学院大学 21世紀 COE プログラム
せんだいメディアテーク



シンポジウム 社会学 v.s. 建築 v.s. アート いま「空間の自由」を問う - 社会 / 建築 / アートの交点 -

2006年9月2日(土) 14:30~17:30 せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

目次

1. はじめに
2. シンポジウム要旨
 - 1) 「空間管理」のパラドックス
- 「安全」を囲い込めない住空間 -
 - 2) 空間の実践
 - 3) 「パラドックス (概念)」から
「トレードオフ (現実)」へ
3. パネリスト略歴
4. 学際研究会*1
5. 関連出版企画

「パラドックス (概念)」から「トレードオフ (現実)」へ

人類の歴史を見ると困難な問題に向き合ってきた地域や民族が将来の覇権を握ったことがわかる。集約的に米を増産し土地を奪う必要の無かったモンスーンアジアよりも、過酷な自然環境で麦を育て、人口を維持するために外部を侵略せざるを得なかったヨーロッパから、帝国主義経営のアイデアが出たことも興味深い。また西方キリスト教がイエスの位置づけのために行った数々のレトリックの醸成過程で、情報収集とアーカイブシステムの絶えざるイノベーションを行ったこともその成功を裏づけている。

ひるがえって我々日本人は、明治以降列強と対抗するという必然性から不慣れた中央集権 (優れたOSを要す) を導入したものの、第二次世界大戦において付け焼刃OSのままで憤死する。その後冷戦という環境にも恵まれ、奇跡的にもものづくりの力を駆使して復興したが、敗北の真相追究を棚上げし、OSの書き換えを怠ったわが国は90年代に西方キリスト教社会の前に二度目の大敗北を喫した。このように信じがたい物理的、精神的な大敗北を何度も経験しながら日本は奇跡のように世界に存在し続けているのはなぜか?

それは「郵便貯金」と「サブカル」という二つの特異な情報形態を「日本的個」が保有していたことによると私は考えている。この未知なる微細OSが遺伝子レベルにインプリントされている日本人は、官のレベルでは最低の国家ながら民のインモラルな力では最高レベルに達していたのである。理系と呼ばれるテクノロジーの創造者の多数がロリ遺伝子を保有しながら武器の代わりにガンブラに熱狂することも、人類の戦争抑止システムにとって有効なひとつであるとノーベル委員会は認知すべきである。*小林よしのり氏と村上隆氏は種々の意味で興味深い検証対象ではあるが・・・

今回のシンポジウムでは「パラドックス」から「トレードオフ」をテーマに、プロパガンタではなく柔軟なチューナーとして調停を繰り返す自作を中心に、高密度情報化社会におけるアートの振る舞いを語りたい。

椿昇 (つばきのぼる)



主催

関西学院大学 21世紀 COE プログラム
せんだいメディアテーク



シンポジウム 社会学 v.s. 建築 v.s. アート いま「空間の自由」を問う

- 社会 / 建築 / アートの交点 -

2006年9月2日(土) 14:30~17:30 せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

目次

1. はじめに
2. シンポジウム要旨
 - 1) 「空間管理」のパラドックス
- 「安全」を囲い込めない住空間 -
 - 2) 空間の実践
 - 3) 「パラドックス (概念)」から
「トレードオフ (現実)」へ
3. パネリスト略歴
4. 学際研究会*1
5. 関連出版企画

パネリスト



佐幸信介 1966年生まれ
2000年 法政大学社会科学部研究科社会学専攻博士課程単位取得退学
2003年 日本大学法学部新聞学科専任講師
専攻は社会学、メディア・コミュニケーション研究、住居論



塚本由晴 1965年生まれ
1994年 東京工業大学大学院博士課程修了
2000年 同大学大学院助教授
専攻は建築設計、建築意匠、建築都市論 博士(工学)



椿昇 1954年生まれ
京都市立芸術大学西洋画専攻科修了
1989年 「アゲインストネーチャー展」で全米巡回
現在、京都造形芸術大学教授
また、「RADIKAL DIALOGUE」プロジェクトで世界展開中

コメンテーター



吉原直樹 1948年生まれ
1977年 慶應義塾大学社会学研究科博士課程単位取得退学
立命館大学産業社会学部助教授、東北大学教養部教授などを経て
2000年より東北大学文学研究科教授
専攻は社会学、空間/場所論、アジア社会論 社会学博士



五十嵐太郎 1967年生まれ
1997年 東京大学大学院工学系建築学専攻博士課程
単位取得退学(2000年同修了)
2005年 東北大学工学研究科都市建築学専攻助教授
専攻は現代建築史・アート論 博士(工学)

主旨説明 / 解題



阿部潔 1964年生まれ
1992年 東京大学社会学研究科博士課程単位取得退学
東京大学社会情報研究助手、関西大学総合情報学部専任講師などを経て
2003年より関西学院大学社会学部教授
専攻は社会学、メディア/コミュニケーション論 博士(社会学)



成実弘至 1964年生まれ
1997年 ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ MA 取得
2000年 京都造形芸術大学芸術学部助教授
専攻は社会学、メディア論、ファッション文化論

ナビゲーター



小野田泰明 1963年生まれ
1986 東北大学建築学科卒業
1998-99年 UCLA 客員研究員を経て、
現在、東北大学工学研究科都市建築学専攻助教授
専攻は建築計画学 博士(工学)

主催

関西学院大学 21世紀 COE プログラム
せんだいメディアテーク



シンポジウム 社会学 v.s. 建築 v.s. アート いま「空間の自由」を問う - 社会 / 建築 / アートの交点 -

2006年9月2日(土) 14:30~17:30 せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

目次

- はじめに
- シンポジウム要旨
 - 「空間管理」のパラドックス
-「安全」を囲い込めない住空間-
 - 空間の実践
 - 「パラドックス(概念)」から
「トレードオフ(現実)」へ
- パネリスト略歴
- 学際研究会*1
- 関連出版企画

学際研究会*1

本シンポジウムは、関西学院大学 21 世紀 COE プログラム「『人類の幸福に資する社会調査』の研究」の一環として組織された「監視テクノロジーが市民生活の『幸福』に及ぼす影響に関する研究」のメンバーによる学際的研究プロジェクトが母体となって発展したものである。

研究班メンバー

阿部 潔 (前述)
デイヴィッド・ライアン (クイーン大学教授)
姜 明求 (ソウル大学教授)
小野田 泰明 (前述)
成実 弘至 (前述)
田仲 康博 (国際基督教大学助教授)
佐幸 信介 (前述)
前田 至剛 (関西学院大学 COE RA)

関連出版企画



『空間管理社会——監視と自由のパラドックス』

阿部 潔・成実弘至 編

(2400 円+税)

- | | |
|--------------|--------------------------------------|
| ①都市の自由とまなざし | 公共空間の快適(阿部潔) ストリートの快楽と権力(成実弘至) |
| ②住まいのポリティクス | 囲われる空間のパラドックス(佐幸信介) デザインされる空間(小野田泰明) |
| ③メディアの自由と不自由 | ネット空間と自由の可能性(前田至剛) 空間と表象の暴力(田仲康博) |

わたしたちは今、どのような社会を生活しているのか? 本書は「公共の空間/住まう空間/メディア空間」という3つの日常的空間から、現代を照射しようと試みた力作論集である。そこに示されているものは、空間の管理が進むなか、「監視」と「自由」が奇妙な形で共存しているパラドキシカルな現代社会の姿だった。

主催

関西学院大学 21 世紀 COE プログラム
せんだいメディアテーク